

現代英語の迂言的 *do* を遡る

宮 前 和 代

0. 迂言的 *do* の謎

近年、動詞の基本的な使い方が十分に習得できていない学生の割合がとみに増えてきた。基礎クラスの学生は言うに及ばず、プレイスメントで一応の基礎は身につけていると判断されたレベルの学生でさえ、否定文・疑問文を言わせようとする途端に怪しくなり、しどろもどろになることがある。否定文も疑問文も中学英語のもっとも初期に学び、それ以来かなりの頻度で触れてきたはずにもかかわらず、である。

この現状について「教育する側」の指導力不足と「される側」の勉強不足を議論しなければならないのはさておくとして、否定文・疑問文を作る際に普通動詞と *be* 動詞で異なった操作をする英文法の複雑さ、特に、普通動詞の否定文・疑問文に現れる *do* の不可思議な振る舞いが学習者を無駄に苦しめていることも事実である。

周知のように、現代英語では、*be* 動詞を含む文は動詞の後に否定辞 *not* を置くことで否定形を作り、主語と動詞を倒置することで疑問形を作る (= (1))。この形式は普通動詞が助動詞と共起するとき (2) とも共通で、規則としてもすっきりしている。

- (1) a. He *is* smart.
 b. He *is not* smart.
 c. *Is* he smart?
- (2) a. He *can* speak English.

b. *He cannot speak English.*

c. *Can he speak English?*

ところが、普通動詞の否定文・疑問文は、意味を持たない *do* (*does, did*) を用いて (3b)(3c) のような形式を取る。これを「回りくどく冗長な表現」という意味で迂言形 (*periphrasis*) と呼び、ここに現れる *do* (*does, did*) を迂言的 *do* (*periphrastic do*) と呼ぶ。それに対して *do* を用いない (3a) のような形式は単純形と呼ぶ。

(3) a. *He speaks English.*

b. *He doesn't speak English.*

c. *Does he speak English?*

(1)(2) と (3) を比較すると、*be* 動詞や助動詞はそれ自体が否定辞のアンカーになり、主語と倒置することで疑問のマーカールになっているのに対し、普通動詞の場合はその役割を迂言的 *do* に担わせている。同時にこの迂言的 *do* は人称や数、時制といった情報のマーカールでもあり、すなわち、迂言的 *do* と本動詞で文法的役割と意味的役割を分業していると言える。普通動詞のみこのような分業をするのはいったいなぜなのだろうか。

さらに、迂言的 *do* が普通動詞の文法的役割部分を担っていると言うのであれば、なぜ肯定平叙文のときにもそうしないのだろうか。肯定平叙文の迂言形 (4) は強調の意味を有するときに限定され、一般的には (3a) のような単純形を取る。

(4) *He does speak English.*

もし普通動詞が構文を問わず常に迂言的 *do* を用いていたなら、英文法は (5) のように現状より一貫性のある記号体系になっていたはずである。英語学習

は現在よりずっとわかりやすく容易になっていただろうし、しかも、動詞は常に原形で現れるので、不規則な動詞の3人称単数形や過去形を覚える必要も無くなってはいたはずなのだ。

(5)¹

	<i>be</i> 動詞	普通動詞	助動詞
肯定文	主語 + <i>be</i>	* 主語 + <i>do</i> + 動詞原形	主語 + 助動詞 + 動詞原形
否定文	主語 + <i>be</i> + <i>not</i>	主語 + <i>do</i> + <i>not</i> + 動詞原形	主語 + 助動詞 + <i>not</i> + 動詞原形
疑問文	<i>Be</i> + 主語 … ?	<i>Do</i> + 主語 + 動詞原形 … ?	助動詞 + 主語 + 動詞原形 … ?

迂言的 *do* とは何なのか、一体どこから現れたのか、そしてなぜ肯定平叙文には現れないのか。数限りない学習者が理解に苦しみ、満足できる答えに巡り会えないまま、英語はそういうものなのだと諦めて無理やり飲み込んできたに違いない。今手元にある文法書を何冊か繙いてみても、その理由にまで言及してあるものにはほとんど出会わないのが実情である。

本論は、現代英語の不合理の一つであるこの迂言的 *do* に焦点を当て、その歴史的経緯を整理し、現代英文法がこのような形を取るようになった言語内外の理由について考えることを目的とする。議論の背景には、現代英語の仕組みを深く理解し定着しやすくするためには歴史的な視点が不可欠であるという信念（宮前 2019）がある。本論の構成は次の通り：第1節で迂言的 *do* の史的発達、第2節でその理由を整理し、第3節では肯定文で迂言的 *do* が用いられない事情について考察する。第4節は結語である。

1. 迂言的 *do* の歴史を遡る

迂言的 *do* は、世界に 6000 あると言われる自然言語の中でもかなり特異な存在である。McWhorter (2008: 5-9) によれば、現代英語と同じように意味の

¹ 文頭の * はその文が通常は用いられないことを示す。

ない *do* を用いて否定文・疑問文を作るのはウェールズ語とコーンウォール語² (いずれもケルト語の方言) のみとのことで、つまり、英語学習者がこれを習得しにくいのは言語類型論的にも当然な帰結と言える³。

実は、迂言的 *do* は英語においても古くから確立していたわけではなく、歴史を遡ってみると *He saw not me* や *Read you the book?* などのような単純形の否定・疑問表現の方がはるかに普通であった。(6)(7)に古い時代の否定文、疑問文の例を挙げておく。それぞれ (a) は 10 世紀, (b) は 15 世紀末の例である。

- (6) a. ac he ne wiðsoc þæt he nære Samaritanisc
 (=but he did not deny that he was a Samaritan) (*ECHom* II, 230,2)
- b. And gyll, my wyfe, rose nott
 (=and Gill, my wife, did not rise) (*Towneley PI* 133, 519)
- (7) a. Canst þu temian hig?
 (=Know you how to tame them?) (*Ælfric's Colloquy* 31, 129)
- b. Gaf ye the chyld any thyng?
 (=Gave you the child anything?) (*Towneley PI* 134, 571)

迂言的 *do* も 13 世紀末頃から現れてはいたものの、その出現は極めて稀で散発的であった。出現の頻度や確立時期は構文 (肯定疑問文, 否定疑問文, 付加疑問文, 否定文, 命令文など) によってもかなり異なり, 現代英語と同じ用法がほぼ確立したのは 17 世紀末から 18 世紀と言われている。英語における迂言的 *do* の歴史は, 思いの外「浅い」のである。

² コーンウォール語の最後の母語話者は 1777 年に死亡したとされるが, 現在も復活や保存のための試みや, 言語研究は続けられている。

³ 類似の例としては, シベリア南東部で話されるナナイ語, イタリア語の一方言が上げられるが, 前者は *do* ではなく *be* を用い, 後者は肯定文・疑問文に *do* を用い否定文には用いないとのことで, 純粋に現代英語とパラレルであるとは言えない (McWhorter (2008: 21-2))。

1.1 否定文の史的発達

本節では、迂言的 *do* が否定文に導入された時期と経緯を見ることにする。Jespersen (1988: 116)によると、英語の否定構造は(8)の5段階を経て確立した。

- (8) a. Ic *ne* secge.
 b. I *ne* seye *not*.
 c. I say *not*.
 d. I *do not* say.
 e. I *don't* say.

(8a) は否定辞 *ne* が定形動詞の前に置かれる形式で、これが古英語期の代表的な否定構造であった。この形式は徐々に *nothing* の意味を持つ *noht* を文末に付加することで「強化」されるようになり、*noht* は *not* となって中英語期の典型的な形式 (8b) が生じる。その後、意味的にも音声的にも存在価値の小さくなった *ne* は脱落することが多くなり、1400年頃には(8c)が普通の形式となる。

ここで登場するのが *do* である。15世紀初頭に初めて否定文に現れた *do* は16世紀に入ると徐々に頻度を増し、以後急速に広まって17世紀には(8d)が一般的な否定文になる⁴。最後の段階として、今度は *not* が縮約されて *do* に後接された(8e)が生じた。同じゲルマン語族に属するドイツ語やオランダ語の否定構文は(8c)のままで留まっている (*Ich sage es nicht / Ik zeg het niet (=I don't say it)*) のに対し、15世紀の段階で英語だけが異なる発達をしたということになる。

ゲルマン語族に属さないフランス語においても、古フランス語の *Jeo ne dis*

⁴ ただし、*know*, *believe*, *care*, *doubt* など特定の動詞では(8c)の形式がかなり長い間保持された。以下に示すのは18世紀の例である。I *care not* if I was never to remove from the place (Defoe, *Robinson Crusoe* 153, 28).

(=*I not say*) という形式に *pas* (語源的には *passum* (=a step) に由来する) を付加して否定の意味を強めた *Je ne dis pas* (標準現代フランス語) が生まれ、後に *pas* が否定辞として再解釈されると *ne* の方が失われて *Je dis pas* (口語体) が生じるという (8) と同じ史的変遷を辿ったが、ドイツ語・オランダ語と同様に (8c) の段階で止まり、*do* に類したものが導入されることはなかった。英語がいかに言語類型論的に「異端」であるかがうかがわれ興味深いところである。

1.2 古英語・中英語における疑問文

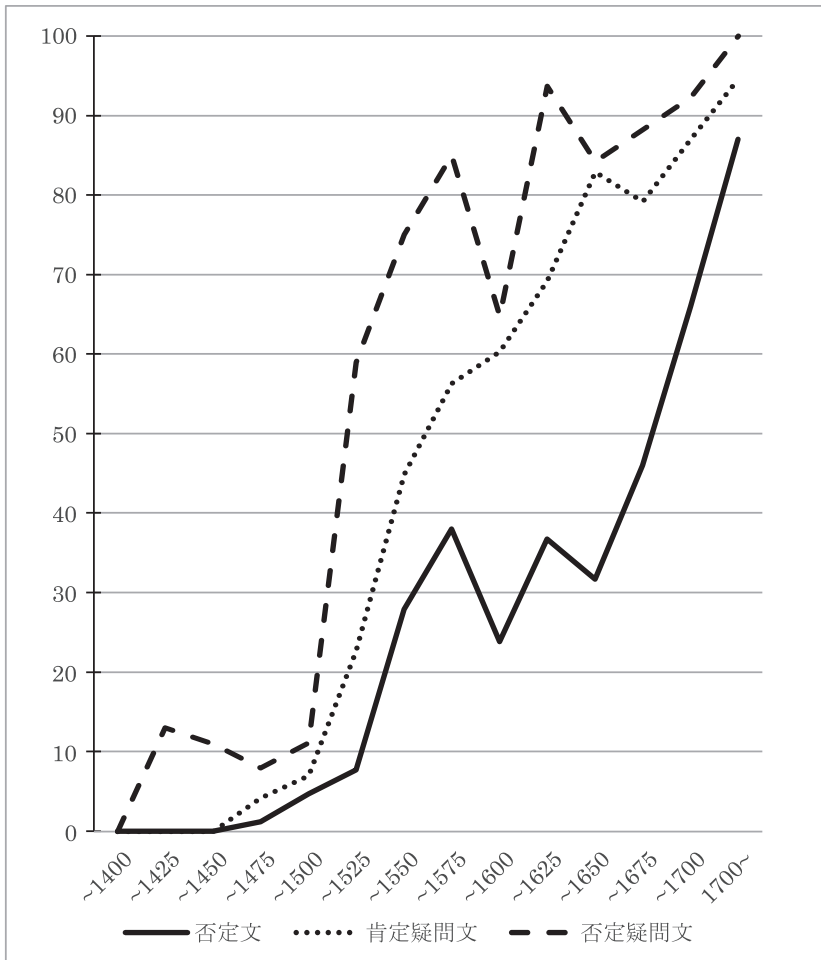
しかしながら、迂言的 *do* が英語に最初に現れたのは否定文ではなく疑問文であった。本節では疑問文の史的発達を概観する。

図 1 は、迂言的 *do* の歴史的拡大を構文別 (否定文, 肯定疑問文, 否定疑問文) に示したものである。疑問文の方が否定文より早く、それも興味深いことに否定疑問文の環境で早く急速に *do* が発達したことが見て取れる。Ogura (1993) によると、実際には迂言的 *do* の現れ方は個々の動詞や言語内外の要因によって一律ではなく、談話的・社会的・文化的要因、音素配列、動詞の頻度などと言った複雑な相互作用が働いていたということであるが、全体としては疑問文が主導する形で拡大していったことは間違いない。

ここで、迂言的 *do* が否定文より先に疑問文で普及した理由を考えてみよう。*do* が疑問文に現れることに何か積極的な意味、あるいは利点があったのだろうか。

古い時代の疑問文と *do* 導入後のそれを対比した場合、大きな違いは主語と動詞の語順にある。つまり、単純形 (9a) では主語と動詞が倒置されるのに対し、迂言形 (9b) では主語と動詞の語順が平叙文のままに保たれる。

- (9) a. *Read you the book?*
 b. *Did you read the book?*

図1 迂言的 *do* の生起率⁵

⁵ Ellegård (1953: 161) に示されたデータを基に作成した。グラフの見易さのために、ここでは肯定平叙文や否定命令文のデータを省き、否定(平叙)文・肯定疑問文・否定疑問文のみを表示している。

14 世紀は、それまで比較的自由度が高かった語順が固定化され、主節・従節問わず「主語＋動詞」が基本的な語順として定着しつつある時代であった。それに続く 15 世紀、疑問文でもこの語順を維持することが望ましいとする判断が働いたのは大いにありそうなことである。稀にはあるが存在していた迂言的 *do* はそのための装置として好都合であったわけで、いわば文法は既存の構造を利用して（つまりもっとも経済的な方法で）、疑問文における「主語＋動詞」の語順の維持を実現したのであろう。これは否定文には存在しない明確な動機であり、迂言的 *do* が疑問文で先に広がった理由であると考えられる。そして、いったんこの傾向が決まると、規範化の圧力によって否定文へも波及していった。

2. 迂言的 *do* の誘因となったもの

さて、1 節では、迂言的 *do* は 1400 年頃から英文法に導入され始め 1500 年から 1700 年にかけて疑問文、否定文の順で一気に確立してきたこと、その主な動機は「主語＋動詞」の語順維持と考えられることを見てきた。本節では、そもそもこの *do* はどこから生じたのか、語順を維持するための装置として選ばれたのがなぜ他の要素ではなく *do* であったのかという問題に議論を進めたい。

この問題については古くからさまざまな説が提案され続けているが、今も決定的な定説と言えるものはない。それぞれに説得力があり、本節では、それらのうちのどれか 1 つが唯一の原因であると考えたよりも、それらが複合的に作用し、言わば「協力し合いながら」大きな文法変化を動機づけていったと見る方が適切であることを述べる。2.1～2.3 節では中尾・児馬（1990）が有力と考える 3 つの誘因を紹介、続く 2.4～2.5 節でそれ以外の可能性に言及し、2.6 節で総括する。

2.1 使役動詞としての *do*⁶

迂言的 *do* をもたらした要因としてもっとも有力視されるのは、*do* の使役動詞としての用法であった。古い時代、*do* は現代語と同じく「する、行う」という意味で本動詞として使われる他、使役動詞として *cause* の意味で用いられることがあった。(10) は 14 世紀チョーサーの例であるが、ここで「*do* + 目的語 + 原形不定詞」は「～に～させる」という意味である。

- (10) a. he *dide* hem drawe (=he caused them to be drawn) (Ch *CT* B 1823)
 b. I … may *do* yow laugh (=I can … cause you to laugh) (Ch *CT* E 352)

この目的語が不定名詞句の場合、情報量が少ないのでしばしば省略される。

- (11) a. Now hastily *do* (someone) fecche (=fetch) a book (Ch *CT* B 662)
 b. þer anon (=thereupon) he *ded* (someone) sende after a fishere
 (=fisherman) (*Havelok* 523-4)

するとこの段階で *do* と原形不定詞が直接に隣り合う構造が生まれたことになる。加えて、この構文は主人が家来などに命令によってその行為をさせるという文脈で多用されたため、不定詞の主語を主節の主語と同一とする新しい解釈が可能になった。言い換えると、*do* を用いない形式と *do* を用いる形式がほとんど意味の差を有さなくなったということである。堀田 (2019: 62) はこの経緯を、本当は大工が仕事をしたのにもかかわらず「聖徳太子が法隆寺を建てた」と言えるのと同じことだと説明する。

このような事情で、*do* は意味的には使役の意味を失い、構造的には原形不定詞の前位置で時制や人称を表す文法的要素となって、助動詞としての歩み

⁶ 2.1 ~ 2.3 節の議論および用例は、特に明記しない限り中尾・児馬 (1990: 70-77) からの引用である。

を踏み出すことになった。この史的变化は、本動詞 *have* が完了の助動詞としての機能を発達させたことや、元々は本動詞であった *cunnan* (=know), *magan* (=have power to) などが法助動詞 (*can, may* など) として確立していったこととも共通しており非常に示唆的であるが、ここではこれ以上立ち入らない。

2.2 代動詞としての *do*

迂言的 *do* の発達をもたらした要因として中尾・児馬 (1990) が第二に指摘するのは、代動詞 *do* の存在である。これは、(12) のように *do* が先行する動詞 (句) の代用表現として用いられるもので現代英語でも普通の用法であるが、すでに古英語の段階から存在していた。(13) は 13 世紀初頭の例である。こうした *do* は本来の「する・行う」という意味が希薄であり、内容語というよりは前方照応的に意味内容を指す文法語 (機能語) に近かったと思われる。この用法も迂言的 *do* の出現を許す前駆現象であった可能性がある。

(12) The boys spilt their milk today as they *did* yesterday.

(13) hit liked me swa swa hit dede *ðe* (=it pleased me as it did thee)

(*Vices & V* 11, 10) (中尾 1972 : 331)

2.3 予測的 *do*

迂言的 *do* の起源として考えられる第 3 の要因は、本動詞 *do* が目的語として動詞原形 (不定詞) を取る用法である。この場合の *do* は「不定詞で示す行為を行う (=perform)」という予測的・後方照応的な意味を持つ。この用法も英語にはかなり古くから存在し、例えば 13 世紀初頭の例である (14) では、*deð* (=do) の目的語は後続の *kuðen* (=show), つまり「見せることをする」という構造になっている⁷。

⁷ 現代英語にはこの用法は残らなかった。McWhorter (2008: 20) によると、ペルシア語が同様な *do* の使い方をすることである。

- (14) he *deð*… mid openlich vuel kuðen his strençðe (=he does… with conspicuous evil (an act of) showing his strength) (*AncrR* 99, 16-7)

この構造も使役動詞 *do* と同じように *do* と不定詞が直接連続する位置に起こること、そして文の中心的な意味はあくまでも後続の不定詞にあることなどから迂言的 *do* の出現を許す土台作りに一役買った可能性がある。もともとの「行う」という意味が希薄になるにつれて、人称や時制の情報のみを示すマーカーへと文法化していったのであろう。

2.4 その他の要因

本節では、そこまで強力な誘因とは言えないものの、現れた迂言的 *do* を補強する役割を果たしたと思われる他の要因について述べる。

まず挙げられるのは、迂言的 *do* は韻律的・音韻的に好都合な側面を持っていたという事実である。チョーサーやシェイクスピアの韻文では、音節を増やし韻律を整える目的で *do* が使われていた（中尾・児馬（1990: 71）、寺澤（2008: 132-3））。例えば、寺澤は(15)の2行目でチョーサーが *dooth* を用いたのは、1行目末の *tarie* と2行目末の *carie* を押韻させるためであったと説明する。このように迂言的 *do* は脚韻の手段として有効であったため、韻文においてより好まれ多用された。

- (15) This Nicholas no lenger wold tarie,
But *dooth* ful softe unto his chamber carie
Bothe mete and drynke for a day or tweye
(=ニコラスはもうぐずぐずせず早速 / 自分の部屋に1日か2日分の / 食糧や飲み水をこっそりと運び込んだ) (Ch *CT* I(A) 3409-11)

加えて、堀田(2019: 63)はもっと実際的な発音上、音素配列上の理由にも触れている。彼は、例えば動詞 *imagine* が2人称単数過去形で用いられる時

はただでさえ長い3音節の単語に *-dst* という人称語尾が付き、さらにその後に冠詞 *the* が続いたりすると極めて発音しにくい音連鎖 [dstð] が現れたはずだと指摘する。それが、迂言的 *do* を用いれば *didst imagine* となり発音上の煩雑さは大幅に緩和されるのである。確かに、言語は使う人間あつての存在なのだから、発音の容易な形式を好み、そちらへ向かう文法変化を「後押し」することは自然なことと言えよう。

もう1点、いわゆる「位置の圧力」が迂言的 *do* に味方したことも見逃すことはできない。すでに1節で、迂言的 *do* は疑問文において「主語+動詞」の語順を維持するために有用であり、それが否定文より疑問文で早く発達させる動機として作用したことを見たが、否定文まで広がると今度は「動詞+目的語」の隣接も確保することになった。

- (16) a. He saw not *me*.
 b. He did not see *me*.

(16)において、単純形 (a) では否定辞 *not* が動詞と目的語の間に介在しているのに対し、迂言形 (b) では動詞と目的語が直接に隣り合っており動詞句としての解釈がより容易となる。英語の語順は14世紀中に固定の度合いを深め15世紀半ばにはほぼSVO語順が確立していたので、迂言的 *do* との時間的な一致は決して偶然とは言えないであろう。

この時代の語順の確立は、生成文法の術語を用いると、名詞の格を豊富な語尾変化で示していた「形態格の時代」から動詞や前置詞などによって構造的に与える「構造格の時代」への変化と言い換えることができる。すなわち、古い時代には目的語名詞の意味役割はその語自体が持つ形態で解釈することができたのに対し、中英語以降ではそうした形態格が水平化され、その結果、他の文法要素との位置関係によって構造格を与えられる必要が生じたということである。従って、(16b) で実現できる動詞と目的語の隣接関係は一見して感じるよりも重要な意味を持っており、迂言的 *do* を下支えする要因になっ

たと考えられるのである。

さらに、言語外の要因として、当時の社会的な風潮もこの流れに味方したと考えられる。迂言的 *do* の使用が圧倒的になった 18 世紀頃は「理性の時代」と呼ばれ、ことばの規則化・固定化と洗練を目指した時代であった。八木 (2018:68-71) は、当時は「言葉遣いを教える教育の力が働いて」「統一化の流れの中で一般動詞では *do* を使う方向が決まってきた」のだと説明する。

このように、迂言的 *do* はそもそもは古い時代の *do* が持っていた多義性や構造的・意味的な要因に動機付けられて出現した。しかしそれだけで確立できたわけではなく、韻律を整える文学的要因、発音の容易さという音声学的な要因、英文法全体の構造変化の方向性、そして人間の理性的判断や規範意識をも含めた多種多様な要因によって後押しされ、最終的にこのように大きな文法変化が実現したのである。

2.5 ケルト語影響説

迂言的 *do* を引き起こした要因として、最後に McWhorter (2008) のケルト語影響説にも触れておきたい。彼は、迂言的 *do* をもつ言語が現代英語の他にはケルト語しかないことからこの説を強く主張する。

ケルト人は紀元前 2000 年頃からブリテン島に定住していた先住民族であるが、5 世紀半ばから始まったゲルマン民族の大移動により徐々に駆逐され、現在はスコットランド北西部やウェールズなどに少数の子孫が残るのみである。その史実から鑑みるにアングロサクソンとケルトの間には少なからぬ言語接触があったはずで、それが英語の基層に影響を与えたというのが McWhorter の主張である。彼は一貫して「言語変化の理由を深く論じない英語史研究者たち」の姿勢を痛烈に批判する立場を取っており、現代英語には迂言的 *do* 以外にもケルト語との共通点があるのに、それに注目する英語史研究者は皆無だと糾弾する。彼の主張は刺激的で、英語史学徒の端くれとしては複雑ながら同意するところも大きいのが事実である。

しかしながら、ケルトとアングロサクソンとの接触は 5 世紀半ばから始まっ

ているのに実際に *do* が英語文献に現れるのはどう早く見積もっても 13 世紀であることを考えると、彼の説に完全に首肯することは難しい。接触した言語の影響が 800 年前後のタイムラグを経て初めて文献に現れ、さらに数百年後に文法として確立するというシナリオは、やはり説得力があるとは言えないのだ。

ただ、近年は、ケルト語が英語に与えた影響について少しずつ議論されるようになってきている段階である。従来は、ケルト語に対しては英語が完全に支配者層の言語であり威信言語であったため、ノルマン・コンクエスト以降のフランス語などとは異なりケルト語から影響を受けることはほとんどなかったとされてきたが、この言語接触も実は文法の根幹に何らかの影響を及ぼしているのかも知れない。特に「文献に現れる以前」の言語、あるいは文献（書き言葉）に現れない話し言葉のレベルで何が起きていたかによっては 800 年の時間差を埋める事情が発見されないとも限らず、今後の研究の発展に注目したいところである。

2.6 まとめ

2 節では、迂言的 *do* の前駆表現として考えられる用法と、それを確立させるに至ったさまざまな要因について考察してきた。要約すると、*do* は古くから「する・行う」という意味の本動詞の他に使役動詞・代動詞などとしても用いられており、それらの持つ形式上・機能上の特徴が迂言的 *do* を引き起こしたのではないかという議論であった。加えて、時には韻律的・音韻的な利点が伴ったこと、英語の構造変化の大きな潮流に合致していたこと、文法規範化という時代の流れもあったこと、もしかしたらケルトとの接触も遠因として働いていたかも知れないことなど、他の動機や要因についても述べてきた。

迂言的 *do* は確かに言語類型的には特異な形式ではあるが、ある日突然理由もなく英文法に現れた「突然変異」などではない。一定の理由に基づいて現れ、さまざまな要因が複合的に働いた結果長い時間をかけて確立した構造

なのであった。

興味深いことに、迂言的 *do* を引き起こす有力なきっかけとなった *do* の用法のうちいくつかはその後文法から消えていった。使役の *do* は他の使役動詞 *make, let, get* などとの競合に敗れて廃用となったし、現代英語では「行う」という意味の *do* は名詞（動名詞）のみを目的語とし動詞不定詞を取ることは許さなくなった。過去には他の構造を誘発するほど強力だった構造が、後の歴史の中で居場所を失い文法から消えていく経緯は妙に人間くさく、好奇心をそそるものである。2.4 節で軽く言及した格の付与方式の変化や動詞句構造の確立のみでなく、法助動詞の発達や機能範疇の台頭など、もっと重大な文法変化が背後にあることが推察されるが、詳しく論じるのは他の機会に譲ることとする。

3. 肯定平叙文の *do* を阻んだもの

さて、本論冒頭に掲げた最初の問い「迂言的 *do* は何者で、いったいどこから現れたのか」については英語史の観点から一定の答えを示してきたので、本節では次なる問い、「なぜ迂言的 *do* は（強調の意味を持たない一般の）肯定文には使われないのか」について考察することにしよう。

迂言的 *do* が通常肯定文にも使われていたなら現代英語はもっと単純で整合性のあるものとなった (=5)) ことは既に述べた通りである。個々の動詞に対して 3 人称単数現在や過去の不規則な形を用いる必要もなくなり、記号体系として経済的でもあったはずなのだ。外国語として学ぶ立場からは言うまでもなく、母語として習得する子供の立場からしてもその方がはるかに望ましかったであろう。なぜ文法はその方向に向かわなかったのか。いったいどのような事情があって、英文法は現在のような形になってしまったのか。

3.1 肯定文の *do* の史的変遷

実は、歴史的に言えば迂言的 *do* はまず肯定平叙文において発生していたことが知られている。中尾 (1972 : 333-4) によると肯定文の迂言的 *do* は 13

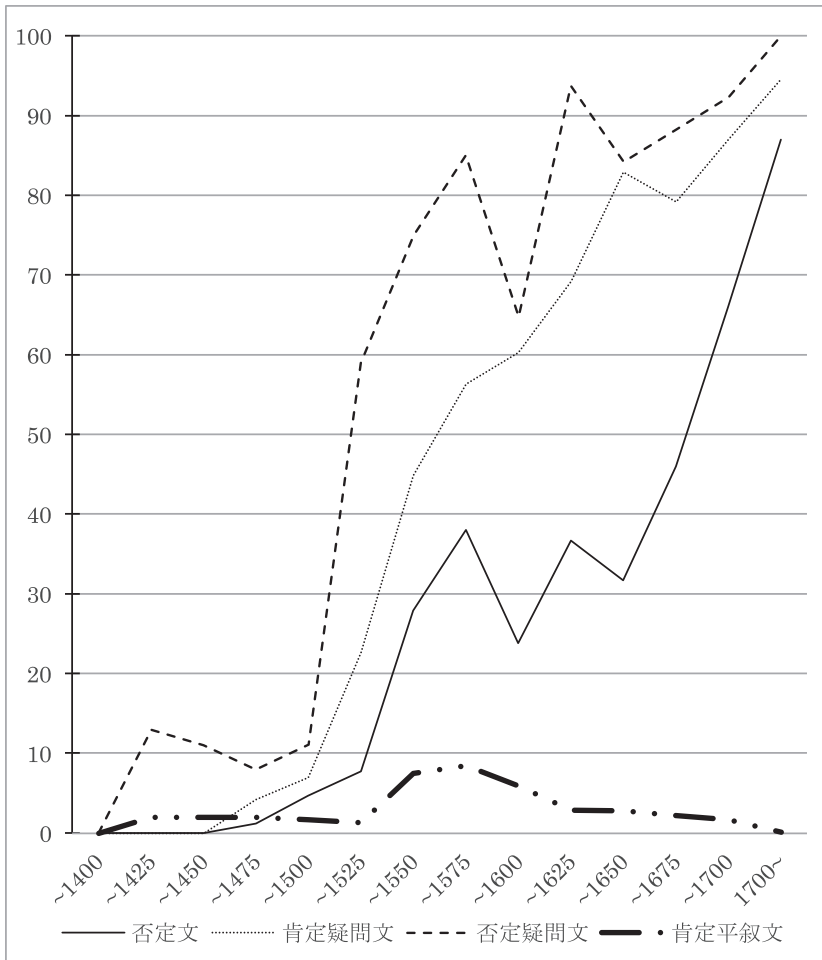
世紀初めから生起しており、これは疑問文・否定文に100年近く先駆けていることになる。特に脚韻詩で好まれ、しばしば副詞と同起したが、疑問文・否定文中と同様、15世紀まではきわめて稀であった。それにしても、いくら稀とは言え先に出現していた形式が現代語に残らなかった事実は、いかにも不思議に思われる。

1節で見た通り、迂言的 *do* は16世紀に入ると疑問文、否定文中の順で爆発的に勢力を伸ばしたが、同じ傾向はわずかながらではあるが肯定文中でも見られた。図2は図1に示した迂言的 *do* 生起率の史的変遷に肯定平叙文の情報を付加したものである⁸。疑問文・否定文ほどの勢いではないものの、16世紀半ばから後半にかけては肯定文中でも頻度が増える兆しを見せていることが読み取れる。

しかし、肯定文における迂言的 *do* は、なぜか確立に向けてそれ以上勢力を伸ばすことはなかった。16世紀末の10%弱をピークに衰退、17世紀には完全に頓挫してしまうのである。この史的変遷はいかにも不自然に見える。「理想の英文法」が実現する一歩手前まで行っていたのにもかかわらず、肯定文だけがいったんは歩み始めた迂言形への道を途中で引き返してしまったのだ。

⁸ 図1と同様、Ellegård (1953:161) のデータに基づいて作成。

図2 迂言的doの生起率（肯定平叙文を含む）



3.2 強調の *do*

迂言的 *do* が肯定文に残らなかった理由を考える前に、本節では現代語に「例外的に」残っている迂言形、つまり強調の *do* について検討しておくことにしよう。

強調の *do* が歴史的にいつ頃から可能だったのかについては、音声的な強勢を確かめる術がないため実証するのが難しい。見解は学者によって大きく異なり、1300年頃を初例とする説から16世紀とする説までさまざまである。*OED* (s.v. *do* 25c) は1581年を初例としている (= (17))。

- (17) But these same … *doe* manye times more offend … than those who
doe commit them

それ以前の例は倒置や命令構造によって強調の意味が引き起こされているように見えるものも多く、果たして現代英文法と同義での「強調の *do*」と言えるのか判然としない。中尾・児馬 (1990: 72-3) は、話者が自分で見聞きしたものが正しいと確信していることを示す動詞 (*consider, say, discern, hear* など) や陳述の正しさを強調する副詞 (*truly, indeed* など) との共起が強調の意味の手がかりになるとし、やはり16世紀の例を挙げている。総合すると、明確に強調の意図を伴って *do* を用いるようになったのは16世紀と考えておくのが無難と思われる。

ここで図2を再度参照されたい。*do* が強調の意味を持ち始めたのが16世紀中であるとするなら、同じ時期に肯定文で迂言的 *do* の割合がいったん増え、そして減り始めている事実は非常に示唆的と言わなくてはならない。この2つのできごとが互いに無関係に起きたとは考えにくく、おそらく密接な因果関係があったと思われるからである。次節で考察する。

3.3 平叙文から迂言的 *do* が消えた理由

前節で、おそらく16世紀には迂言的 *do* に強調の用法が生じたという見方

を示したが、その正確な時期がいつであったにせよ、それが肯定文の史的發達に少なからぬ影響を与えたのは想像に難くない。なぜなら、それは *do* の有無によって意味の対立が生じたということの意味し、肯定文に単純形・迂言形の両方が共存する道が生まれたことを意味するからである。

そもそも、同じ意味を伝達する形式が1つの文法に複数存在するのは不経済であり、言語がその状態を長く維持することは自然なことではない。疑問文・否定文で迂言形がかなりの勢いで単純形に取って代わったのは、2つの形式が完全に同じ意味であったため、記号体系として望ましい方（迂言形）が採用されると同時に他方（単純形）は廃用になったためであった。

しかし肯定文の場合は、*do* に強調という特別な意味役割が生じたために迂言形は通常の肯定文では使えなくなった。そのため単純形が生き残る必要が生じ、文法内に2種類の肯定文が存在することになったのである。

おそらく、*do* が初めて強調の意味を帯びて使われ始めた頃には、先行していた他の「意味の希薄な *do* + 動詞原形」の連鎖が（少なくとも形式的には）誘因として働いていたに違いない。肯定文全体としても疑問文・否定文に倣う形で迂言形に向けて歩み始める兆しを見せており、これは文法全体の整合性という観点から自然な動向と言えた。それが16世紀前半のことである。

ところが、*do* の強調としての意味役割が明確になってくるにつれて、肯定文の *do* は疑問文・否定文におけるそのような「意味のない *do*」ではなく、明確な意味を伴う別物に変質していった。それに従って強調の意味を伴う肯定文は迂言形、伴わないものは単純形という使い分けが生じることになり、当然のことながら迂言形の生起率は落ちていった。図2で17世紀初頭に肯定文中の迂言的 *do* が決定的に衰退しているのは、この時期に使い分けが確立したことを意味しているのであろう。

このように見てくると、*do* に強調の意味が生じたことは、英語にとって非常に決定的な、「バタフライ効果」ともいうべき出来事であったと思えてくる。先行する *do* 迂言形に倣う方向で初めて強調の *do* が生まれたとき、それは形式的には *do* のささやかな勢力拡大であり、意味的にも「いつ」と明確には

指し示すことができないほどささやかな変化であった。しかし強調の *do* は 100 年ほどの間に確固たる存在意義を有する要素に成長し、強調の意味を持たない肯定平叙文から *do* を追い出してしまった。そして結果として、時代に逆行し単純形を復活させることになり、記号体系としての整合性・経済性をいささか損なうにもかかわらず、英文法の基幹ともいべき規則を現行の形に方向づけてしまったのである。小さな蝶の羽ばたきが大きな気候変動を起こすというバタフライ効果を連想するのも無理からぬところではないだろうか。

逆に言うと、もし *do* に強調の意味が加わることがなかったなら、迂言形の「完全勝利」、つまり「理想の英文法」が実現していた可能性もあった。これは英語学習者・教員として切実な「たられば」なのだが、絶対的な方向性を伴って自律的に構造変化しているように見えることの多い言語が、時にはこのようなバタフライ効果によって運命を大きく変えているのを知ると、少々不思議な気持ちになる。

ところで、堀田 (2019) はイギリス史の視点からも興味深い「たられば」をもう 1 つ紹介している。以下に引用する。

「肯定平叙文での *do* が頓挫した 17 世紀初頭には、未婚のエリザベス 1 世が亡くなり、スコットランド王ジェイムズ 6 世がイングランド王ジェイムズ 1 世として即位するという歴史的な出来事があったが、このジェイムズの母語であったスコットランド英語では迂言的 *do* の使用は稀だった。このような方言を持つ新王とお付きの者たちが、ロンドンで話される英語に影響を与えたのではないかという説である。歴史の『もし』に過ぎないと言えばそれまでではあるが、もしエリザベス 1 世が自身の後継を残していたのなら迂言的 *do* が勢力を伸ばしていたかもしれない。(堀田 (2019 : 63))」

なるほど、当時イングランドではすでに迂言的 *do* が優勢であったが、スコットランド王の即位によってスコットランド英語が威信言語となり、威信言語で好まれていた単純形が復権したのではないかという説である。言語内の変化のみに気を取られるのではなく、言語使用の現場の社会的要因にも目

を向ける必要性に気づかせてくれる重要な視点である。

ただ、その蓋然性については、2 節で述べたケルト語影響説との関係が少し気になる。もし McWhorter が主張するようにそもそもケルト語との接触が迂言的 *do* の遠因になっている可能性を考慮に入れるとするなら、ケルト語の末裔であるスコットランド語が 17 世紀まで単純形を維持していて、逆方向に文法を引き戻す勢力になると言うのはいささか唐突に思われるからである。もちろん、この時代に至るまでにスコットランド語も独自の史的变化を遂げていて、1000 年前とは逆方向への影響を与えたと言う可能性もなくはない。そういうことが起こっていたとしたらこれはこれで大きな歴史の皮肉となるわけで、いずれにしても、英語における迂言的 *do* には興味が尽きることがないと言うばかりである。

4. 結語

以上、本論は現代英語の迂言的 *do* の本質を探ることを目的に、その史的盛衰の経緯や理由について論じてきた。ともすれば不合理と感じられ、学習者泣かせとも言える迂言的 *do* は英語にもともと備わっていたものではなく、さまざまな動機や前駆表現によってもたらされた、比較的新しい文法手段であることを明らかにしてきた。議論の中では特に、この文法変化には言語内の事情のみではなく、文体・韻律・音韻面での都合や規範意識といった人為的な理由、時にはニュアンスのわずかな揺れや社会情勢の変化など、多種多様な要因が関与してきたと思われることを強調してきた。

本論の議論を通じて、筆者はたくさんの「たれば」を痛感することが多かった。もし古い時代の *do* に使役としての用法がなかったら、あるいはもし「～することを実行する」という意味で2つの動詞を並べる用法がなかったら、*do* は助動詞化する道を選んでいただろうか。英語が語順ではなく（ドイツ語のように）形態で格を示す方式を維持していたなら、そもそも *do* を導入する動機は生じたのだろうか。そしてもし英語が *do* ではなく *actually*, *really*, *in fact* のような副詞（句）で強調を示す方策を優先していたなら、迂

言的 *do* は肯定文にも生き残っていたのだろうか。現代英語の迂言的 *do* は、これらの小さな選択が結集した壮大なバタフライ効果の結果であると言えるのである。

言語の史的変化を論じるとき、それを構造やパラメータの変化と分析して Q.E.D. としてしまうことがしばしばあるが、どんな構造変化も決してある日突然、恣意的に起こるものではない。本論でも見てきたように、背後には先行表現との類似やそれによる表現の揺れや誤用、解釈・発音の容易さといった、言語運用現場の事情も重要な役割を果たしていることを忘れてはならない。

とは言え、もちろんこれら諸々の事情を概観しただけでは目的の半分しか達しておらず、英語史学徒としては、その結果生じた文法変化はあくまでも構造の変化として言語学的な術語で記述することを目指さなければならないとも考えている。本稿の議論を通じて、迂言的 *do* 確立の背景には他の法助動詞や完了形の確立と共通する構造変化があること、そこにはおそらく句構造の確立や格付与、機能範疇の台頭といった構造的な分析・説明が必要とされることも垣間見えてきた。この変化全体を「何らかのパラメータが変わった」という一言で片付けることなく、包括的に分析・説明することを今後の課題としたい。

参考文献

- 小野茂・中尾俊夫 (1980) 『英語史 I』 東京：大修館．
 片見彰夫・川端朋広・山本史歩子 (2018) 『英語教師のための英語史』 東京：開拓社．
 寺澤盾 (2008) 『英語の歴史——過去から未来への物語』 東京：中央公論新社．
 中尾俊夫 (1972) 『英語史 II』 東京：大修館．
 中尾俊夫・児馬修 (1990) 『歴史的にさぐる現代の英文法』 東京：大修館．
 堀田隆一 (2009-) *History of the English Language Blog*, retrieved August 4, 2019,

from <http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/>

- 堀田隆一 (2019) 「英語史のツボ (第6回): なぜ一般動詞の否定文・疑問文には *do* が現れるのか」『英語教育』第68巻第6号, 62-63. 東京: 大修館.
- 宮前和代 (2019) 「深みのある英語教育を目指して——歴史的視点が与えるもの」『専修大学外国語教育論集』第47号, 29-48.
- 安井稔・久保田正人 (2014) 『知っておきたい英語の歴史』開拓社叢書 24, 東京: 開拓社.
- 八木克正 (2018) 『英語にまつわるエトセトラ』東京: 研究社.
- Ellegård, A. (1953). *The Auxiliary 'Do'*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Jespersen, O. (1988). *Growth and Structure of the English Language*, the revised edition edited with notes by Toshio Nakao. Tokyo: Nan'un-do.
- McWhorter, J. (2008). *Our Magnificent Bastard Tongue: The Untold History of English*. New York: Avery.
- Ogura, M. (1993). The development of periphrastic *do* in English: A case of lexical diffusion in syntax. *Diachronica*, 10, 51-85.